

## 長瀬でカエデを愛でる

清家 一馬

秩父鉄道上長瀬駅からほど近い荒川沿いに「月の石もみじ公園」があります。ちょうど当博物館の向かい、道路と同じ高さの段丘面上に位置しています。”月の石”の名は、高浜虚子がこの地で残した俳句の一節に由来します。ここには50本余りのカエデが植えられています。

葉が色づく11月中旬ごろから11月終わりごろまで、この紅葉をより楽しんでもらおうと、長瀬町では紅葉祭りを開催しています。夜になると、長瀬駅から「月の石もみじ公園」までの道でライトアップが実施され、当博物館も正面のカルカロドン・メガロドンやカエデをライトアップしました。普段はムササビやアオバズクなどの野生動物しか見かけない夜の林に大勢の人が訪れます。師走のころには、また普段の静かな林に戻ります。

この紅葉祭り、紅葉の美しさはもちろんのこと、落ち葉を踏む感覚を楽しんだ方々も多かったのではないのでしょうか。大きめのクヌギの葉と小さなカエデの葉が積み重なった落ち葉の絨毯を踏みしめると、秋が終わる寂しさと同時に優しく地面を覆っている落ち葉が少し愛おしくなりませんか。落ち葉の山に埋もれて遊んだことのある人なら、懐かしさを感じられるのではないのでしょうか。

さて、ここの紅葉は、“今年、他の紅葉名所のよりもずっと綺麗に色づいている”とうれしい感想を頂いた一方で、残念に思うことがありました。開館時間外の駐車場利用は思わぬトラブルの原因となりますし、カエデの枝を折っていくような行為は寂しい気持ちになります。旅してその場に残すのは、足跡とその地への思いやりであってほしいですね。



ライトアップ風景（月の石もみじ公園）

（せいけ かずま・主事）

## ムササビのお家

奥村 みほ子

2015年6月に当館敷地内のアカマツ林でムササビの生息が確認されました。そこで、今年度は、当館東側にある荒川河畔林まで範囲を広げ、生息調査を行いました。以前この河畔林からは、ムササビの死体が見つかったことから、生息していることは推測できていましたが、生きていた姿は確認されていませんでした。今回、今関沙和 外部研究員と一緒に調査を行い、ようやく生息しているムササビの姿を確認できましたので、調査でわかってきた生態について紹介します。

ムササビは夜行性のため、調査は日没後に行いました。また、樹上で生活しているため、まずお目にかかる機会はありません。河畔林には、ねぐらや、葉及び種子が餌になりうるケヤキやクヌギ、カエデ類、アカマツなどの樹木がたくさんあること、また4頭程度のムササビが生息していることが確認できました。しかし、河畔林は北側が竹林、南側は藪で、西側は道路と住宅、東側は荒川で樹木による連続性がありません。面積も狭く、ムササビの生息においては、4頭も縄張りを持つには狭いくらいです。お互い気を遣いながら、ストレスを感じて暮らしているのかも知れません。



2016年は、12月に、ムササビの観察会を行う予定です！

撮影：清家 一馬

上の写真は、ムササビが木の幹にあるねぐらから顔を出したところです。このねぐらは、今関 外部研究員がアカマツにあいたねぐらと考えられる樹洞を観察していた際、別のねぐらから顔を出したムササビに逆に観察されていて、見つけたねぐらです。ムササビたちは、この河畔林で世代を重ね、人が気づかない内に着実に紡がれて来た歴史を持っているのでしょう。博物館の歴史よりもずっと長いはずです。かれらを見守るためにも今後も観察を続け、より詳しい生態を明らかにしたいと考えています。

（おくむら みほこ・学芸員）